

日本語オノマトペにおける意味のネットワーク ：擬音語から擬態語への意味拡張

@nov0513

1. はじめに

現在、これまでは言語学において周辺的なテーマとされてきたオノマトペが、注目を集めはじめている。特に、音象徴との関連においては、言語学のみならず心理学の方面からの研究も増えている。

しかし、その音象徴に関しては、未だ一般性をもつ知見が得られていないように思われる。特に、現実世界の音と直接のつながりをもたない擬態語においては、どうしてそのような音で表現されているのか、解明されていない部分が多い。

そのため本発表は、擬態語のいくつかを意味的・形態的に近い擬音語と結びつけ、音象徴を考察すべき擬態語の数を減らすことを目的としている。

方法としては、オノマトペを語基レベルで考察し、語基のレベルで擬音語と擬態語の意味を持つオノマトペ（語基レベルで多義的なオノマトペ）においては、擬音語の意味がメタファー・メトニミーにより意味拡張され、擬態語の意味を得ていることを主張することを目指した。

本発表がオノマトペと音象徴との関係における議論の進展の一助となれば幸いである。

2. 先行研究

本章では、日本語のオノマトペに関する研究の内、本発表に特に関連のあるものについて紹介する。特に、形態と意味に関する研究を取り上げる。

2.1. 日本語オノマトペの意味的・形態的分類

2.1.1. オノマトペの定義

まずはじめに、本発表で扱う「オノマトペ」というものを明確にしておきたい。オノマトペは、一般的に擬音語と擬態語の総称であるとされている。擬音語とは現実世界の音を言語音で模倣したものであり、擬態語とはものごとの状態や様子を言語音によりあらわしているものである。この擬音語と擬態語に関して、さらに下位

の分類が存在すると主張する研究がある。例えば金田一(1978)は、オノマトペを以下の様に分類している。

(1) 金田一(1978)の分類

擬音語・・・・外界の音を写した言葉

擬音語・・・・無生物の音を表すもの

擬声語・・・・生物の音を表すもの

擬態語・・・・音を立てないものを、音によって象徴的に表す言葉

擬態語・・・・無生物の状態を表すもの

擬容語・・・・生物の状態(動作状態)を表すもの

擬情語・・・・人間の心の状態を表すもの

田守(1993)においては<音性>のあるなしで擬音語と擬態語をわけ、さらに擬音語を<声性>のあるものを擬声語、ないものを擬音語としている。また、擬態語を<心性>があるものを擬情とし、そこからさらに<表層性>のあるものを感覚、ないものを感情と分類し、擬態語の内<心性>のない非擬情を<有生性>のあるなしでさらに区別して<有生性>のあるものを擬容、ないものを擬態とした。他に代表的なものとして伊藤(2002)などもあるが、本発表では「音と直接的に結びつきのない擬態語」を「音と直接的に結びついている擬音語」と関連づけることを目的としているため、単に擬音語と擬態語の2分類で留めておくことにする。ただし、この態度は擬情語や擬声語といった下位分類の存在を否定するものではない。また、以降で単に「オノマトペ」と表記する場合、日本語における擬音語と擬態語の総称であることを付け加えておく。

オノマトペは擬音語と擬態語のどちらか一方にだけ属することはあまりなく、擬音語と擬態語の両方の意味を持つオノマトペは少なくない。ラキムジャン(2010)はこのように複数の分類の意味を同時にもつオノマトペ(ラキムジャン(2010)は広義の擬音語と擬態語を設定し、その下に擬声語・狭義の擬音語・擬情語・狭義の擬態語の4分類をしている)に関して、以下の様に定義づけている。

(2)

単義語：1つの形式が1つのみの語義を持つ語のこと

単一多義語：1つの形式が1つ以上の語義を持つが、それは同一の下位類に属する語のこと

多義混成語：1つの形式が1つ以上の語義を持つが、それは複数の下位類に属する語のこと

本発表では、広義の擬音語と広義の擬態語の2分類のみであるので、ラキムジャン(2010)の多義混成語のみを参考としたい。しかし、既に混成語は言語学において他の事象をさす用語として存在しているため、多義混成語を本発表では以下の様に定義し直したい。

(3)

多義的オノマトペ：1つの形式が擬音語と擬態語の両方の意味をもつこと

2.1.2. 日本語オノマトペの形態

日本語のオノマトペは、現在 3000 を超える数が存在すると言われている。この数は、他の言語と比べると比較的多いものとされている。これは、日本語のオノマトペのシステムが非常に生産的であるからとされている。

日本語のオノマトペには中心的なかたちと付加的要素が存在し、それらが組み合わされることによりこのような膨大な大系を作り上げている¹。

これらを天沼(1974)や金田一(1978)、田守・スコウラップ(1999)は中心的なかたちのモーラ数を元に、中心的なかたちと付加的要素がどう組み合わせられているかによって、オノマトペの出現パターンを分類している。金田一(1978)はこの中心的なかたちを語根、田守・スコウラップ(1999)では基本形と呼んでいる。角岡(2001)はこれを語基と名付けており、本発表もこれに従い「オノマトペの中心的なかたち」を語基、またはオノマトペ語基と呼ぶことにする。

また付加的要素について、Waida(1984)はオノマトペに必須であり、かつ日本語においてオノマトペ特有の性質をもつとしているために、オノマトペ標識と呼んでいる。しかし田守・スコウラップ(1999)やラキムジャン(2010)は、「ふ」と「つ」のようにオノマトペ標識を必須としないオノマトペが存在し、また「促音」「撥音」「長音」においては他の日本語の語彙の中にも見受けられると主張している。そのため、本発表では、ラキムジャン(2010)にならい、オノマトペの構成要素²と呼ぶことにす

¹ しかし、それらの組み合わせは自由に行われるものではなく、日本語の音韻体系による制限も受けていると那須(1995,1999a,1999b,2001)は述べている。また、村田(1993)も、語基同士のむすびつきかたも意味的・音韻的な制約があるとしている。

² ラキムジャン(2010)は「一般的には、「標識」(marker)という用語は、生成文法など

る。

本発表におけるオノマトペ語基と構成要素を以下の様に定義する。

(4)

オノマトペ語基：意味的・形態的にオノマトペの中核をなす1モーラまたは2モーラのもの。オノマトペの構成要素を除いた時に残るかたち。

構成要素：オノマトペ語基とむすびついて意味的・形態的に語彙を増やす要素。
促音、撥音、長音、-リ音、語基の反復。

このオノマトペの構成要素は、ただ語彙を増やすためだけのものではなく、語基と結びつくことにより、それぞれに意味を付加する。(5)は田守・スコウラップ(1999)の要約である。

(5)

促音：瞬時性、スピード感、急な終わり方。語中においては強調。

撥音：語末においては共鳴。語中では強調。

長音：擬音語・擬声語においては物理的に長い音。擬態語では強調。

-リ音：ゆったりした感じ、完了

反復：音や動作の繰り返し、連続

(6)

「ばた」：ばたっ、ばたん、ばたーん、ばたり、ばたばた

逆に、構成要素がついているオノマトペから構成要素とその意味をとりのぞくと、その語基の基本的な意味が残ると言える。本発表においては、このオノマトペ語基を考察対象と中心として位置づける。

2.2. オノマトペの意味拡張

ラキムジャン(2010)は、「じりじり」という擬音語と擬態語(擬態語と擬情語)の語義を持つオノマトペを例に挙げて、意味拡張の際の具象性・抽象性について説明している。

でも使われ、語や文に付いたりそれを変更したりすることによって文法的機能を示すものをいう。形態論ではあまり扱わない用語でもある。」「促音/Q/・撥音/N/・/ri/・長音/R/・反復は、「語」という構造体に属し、その語を構成する要素でもあるというふうに考えると、「標識」という用語よりは「構成要素」という用語の方がより適切になる。」と述べている。

(7) 「じりじり」

【意味①】 S1 : A muffled bussing sound, as of an alarm clock ringing.

【意味②】 S2 : A sizzling sound, as of oil or hair burning.

【意味③】 M1 : The manner in which the sun beats down on a hot sunny day.

【意味④】 M2 : The state of being impatient.

【意味⑤】 M3 : The manner of progressing a little at a time.

(Takehi, Tamori, Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*)

(2) ろうそくがじりじりと音を立てて燃え尽きた。

(3) 真夏の太陽が、猛暑の中農作業に汗を流している老人を、容赦なくじりじり（と）照りつけた。

(4) 約束の時間に遅れているとき、せっかく乗ったタクシーが信号待ちをしたりするとじりじりする。

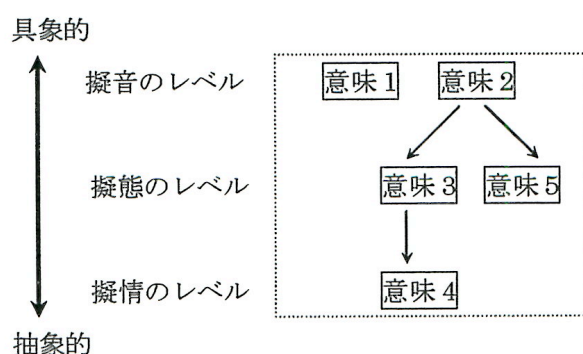
(5) 敵軍が砦に向かってじりじり（と）攻め寄せて来ていた。

(阿刀田, 星野(1995) pp.219-220)

意味2は燃え焦げる時の音を表し、意味3は太陽が熱く照りつけて身体の一部が焼き焦がされるように暑く感じられるということを意味している。これらはともに「熱い」というイメージで共通しているため、＜ものが焼ける音がする＞→＜焼かれるように熱い＞のように意味拡張が行われるという。同様に、意味3＜焼き焦がされるように熱く感じられるさま＞から意味4＜心が（焼き焦げるように）いらだって落ち着かないさま＞へと、意味2の「ものが少しずつ燃え焦げる音」が意味5の「少しずつ刻むように迫り進む様子」へと意味が拡張されたと述べている。意味1は、「ベルの連続音」であり、他と関連する意味がないため、同音異義語だとしている。

この「じりじり」の意味拡張は、図のように示されている。

図1 「じりじり」の意味拡張



ラキムジャン (2010) は、意味拡張は具象性が高い擬音語から抽象性の高い擬態語へと行われ、その逆は不可能だろうと述べている。

他にも、伊藤(2010)は共感覚比喩を用いた上で、やはり擬音語から擬態語への拡張を主張している。

筆者自身も、オノマトペの意味拡張は擬音語から擬態語へとなされるものであると考えているが、ラキムジャン(2010)はなぜ抽象度の高い方から具象度の高い方への拡張が不可能であるか、ということについては殆ど触れていない。また、伊藤(2010)においても、共感覚比喩を用いた拡張を想定しているため、擬態語としての「すーっ (胸がスーッとする)」などといった、五感に属さない内的感情をも共感覚比喩の中に含めるという拡大解釈を行っている。また、伊藤(2010)も、特に具体的な説明なしに擬音語から擬態語へ拡張するとしているため、それが逆ではどうしてだめなのか、といったことには触れられていない。

本発表においては、メタファーやメトニミーをのみ用い、オノマトペが意味拡張される過程を示す。この時、ひとまず先行研究にならい擬音語から擬態語への拡張過程を示したうえで、それが逆に擬態語から擬音語へとさかのぼることが出来るかどうか検証する。

2.3. オノマトペと音象徴

オノマトペは音象徴と密接な関連があるとされている。田守・スコウラップ(1999)は音象徴を「音声はたまたまそれを含む特定の語の固有の意味とは別の象徴的な意味、すなわち一般に想定されている語と意味の慣習的な関係を超える意味を示唆することがある」性質のことだと述べている。

音象徴についての研究は Jespersen(1922)や Sapir(1929)のものが古く、日本語においても多くの研究がなされてきた。例えば、鈴木(1962)や田守(2002)は、有声無声の対立があるオノマトペを例にあげ、有声のものは無声のものに比べて好まし

くない様子、分量が多い様子、かたちが大きい様子、動作が活発である様子があると述べている。また、Hamano(1986)は日本語オノマトペにおいては第1モーラの子音が最もオノマトペに音象徴の効果を与え、次に第1モーラの母音の影響も強いなどのことを述べている。

表1 Hamano(1986)による日本語オノマトペにおける第一モーラの母音・母音における音象徴的意味

母音	音象徴的意味
/i/	線、一直線に伸びたもの、甲高い音
/a/	平べったさ、出来事、全面的関与、広がり、華やかさ、派手さ、目立った出来事
/o/	丸いもの、小さい出来事、影響の小さいこと、目立たない出来事、控えめな出来事
/u/	口や鼻のような小さい丸い穴と関係のある出来事、突出、柔らかくて控えめな音
/e/	不適切さ、下品さ
子音	音象徴的意味
/p/	急で爆発的な動作や出来事、ぴんと張った状態、突然性、力強さ、活発さ、(軽い)打撃
/b/	急で爆発的な動作や出来事、ぴんと張った状態、突然性、力強さ、打撃
/t/	(軽い)打撃
/d/	打撃
/k/	硬い表面との接触、高い音、くぼみ、軟口蓋音
/g/	硬い表面との接触、高い音、くぼみ、軟口蓋音
/s/	滑らかさ、障害の欠如、動作が急でないこと、軽い接触、摩擦、小粒の動き、表面の張りのなさ、流動する液体、静けさ、穏やかさ、爽快さ、こざれいさ、スマートさ、冷静さ
/z/	滑らかさ、障害の欠如、動作が急でないこと、軽い接触、摩擦、小粒の動き、表面の張りのなさ、流動する液体、静けさ、穏やかさ、爽快さ、こざれいさ、スマートさ、冷静さ
/h/	息、息の吐き出し、不確定、頼りなさ、弱さ、繊細な優雅さ
/m/	はっきりしない状態、落ち着きのなさ、理性のなさ
/w/	動物や人間の発する音

筆者自身もオノマトペと音象徴は強く関係しているものと考えているが、音象徴の問題を絡めると非常に複雑な問題となってしまうため、本発表においては音象徴に関しては触れず、擬音語から擬態語への意味拡張の問題のみを取り上げる。

3. 語基レベルで多義的なオノマトペにおける意味拡張

本章では、日本語のオノマトペが語基を中心とした関係において、どのように拡張されるかを見る。

この時に問題となるのは擬音語と擬態語のどちらが元の意味でどちらが派生された意味なのか、ということであるが、ひとまずは先行研究にならない擬音語から擬態語へと派生していくと仮定して論を進め、その後に検討したい。

3.1. 「かた／がた」の意味拡張

意味拡張の分析事例として、語基に「かた／がた」をもつオノマトペ「かたかた、かたっ、かたり、かたん／がたがた、がたっ、がたり、がたん」を取り上げる。

(1) 「かたかた」

- a 箱を振ると中で何かがかたかた音をたてる。(阿)³
- b 地震みたいね。棚のものがかたかたしているもの。(阿)

(2) 「がたがた」

- a 台風で雨戸が一晩中がたがたいたってた。(飛)
- b 机が歪んでしまい、引き出しががたがたする。
- c 監督が替わってからはチームががたがたになってしまった。(阿)
- d 経営難でね。会議、会議でがたがた騒ぐだけでどうにもならん。(阿)
- e 火のない山小屋でみんな抱き合ってがたがた震えながら一夜を明かした。
(阿)

(1a)と(1b)は両方とも擬音語である。どちらも<軽やかたいものがぶつかる音>を表しており、それが現実空間においてどんな事象と結びつくか、という違いでし

³ 例文の末についている(阿)、(飛)、(山)は、その例文の出典を表す。(阿)は阿刀田・星野(1993)『擬音語擬態語使い方辞典』を、(飛)は飛田・浅田(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』、(山)は山口(2003)『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』である。何も記していないものは作例である。

かない。この(1a)(1b)の<軽くかたいものがぶつかる音>は<軽くかたいものがぶつかる様子>という擬態語をも表すことができる。これは、「軽くかたいものがぶつかる時の音」という聴覚的情報からその「軽くかたいものがぶつかる時の動き」という視覚的情報へとメトニミーにより焦点が移動したことによって得られるものである。この<軽くかたいものがぶつかる様子>を(1a')(1b')とする。

(2a)は、<重くかたいものが振動してぶつかる音>であり、(2b)は<組み合っている重くかたいものが不調により振動する音>である。どちらも「重くかたいものが振動して何かにぶつかる音」であるが、しばしばそれに<不調>というイメージを伴う。これは、清濁の対立における濁音のイメージによるものである。この(2b)の聴覚的情報から視覚的情報へとメトニミーによって焦点が移動し、(2b') <組み合っている重くかたいものが不調により振動する様子>が得られる。その(2b')から(2c)の擬態語の<組織が不調である様子>という意味へとメタファーによって拡張される。起点領域は<空間での動き>であり、目標領域は<組織の様子>である。

[がたがた b'→がたがた c]

【メタファーによる意味拡張】

起点領域[空間での動き]

目標領域[組織の様子]

スキーマ<<組み合っているもの>><<不調>>

(2d)は、擬態語<組織が不調な時にでる文句、または不調にする文句>であり、(2c)とは時間的な近接性がある。そのため、(2c)から(2b)へはメトニミーによって意味が拡張していると言える。

[がたがた c→がたがた d]

【メトニミーによる意味拡張】

<組織が不調である様子>→<組織が不調な時にでる文句><組織を不調にする文句>

また、(2b')は(2e)の<身体が不調により振動する様子>という擬態語へとメタファーによって拡張される。目標領域である(2e)の領域は[身体]である。

[がたがた b'→がたがた e]

【メタファーによる意味拡張】

起点領域[空間での動き]

目標領域[身体]

スキーマ<<振動>><<不調>>

(3) 「かたっ」

- a オルゴールはかたっと言って止まった。(飛)
- b 隣の部屋で何かがカタッと落ちる音がした。(飛)

(4) 「がたっ」

- a 雨戸ががたっ和外れた。(飛)
- b 机の上からものががたっと落ちた。
- c その海岸は二百メートル先でがたっと深くなる。(飛)

(3a)は<軽やかたいものが1回ぶつかる音>を表す。「かたかた」との違いは、語基が反復されているかどうか、つまりその音が繰り返してなっているかどうか、という違いにより生じるものである。(3b)も擬音語であり、<軽やかたいものが落下してぶつかる音>を表す。

(4a)(4b)は擬音語であり、<重やかたいものが1回ぶつかる音>を表す。(3b)と同様、しばしば(4b)のように重やかたいものが落下し、床や地面とぶつかる時の音としても使われる。この(4b)から聴覚的情報<重やかたいものが落下してぶつかる音>から擬態語としての視覚的情報(4b')<重やかたいものが落下してぶつかる様子>へとメトニミーによって焦点移動がおこり、そこからさらに(4c)の<数値や状態が急に下がる様子>という擬態語へとメタファーによって意味が拡張される。

[がたっ b→がたっ c]

【メタファーによる意味拡張】

起点領域[空間での動き]

目標領域[程度の動き]

スキーマ<<落ちる>>

(5) 「かたり」

- a かたりと小皿が響いた。(山)
- b 人形の糸が切れ、かたりと床に落ちた。

(6) 「がたり」

- a がたりとドアが開く音がした。(山)

b 彼の手から銃ががたりと落ちる。

(5a)と(5b)は擬音語であり、「かたっ」と同様、＜軽ुकたたいものが1回ぶつかる音＞と＜軽ुकたたいものが落下してぶつかる音＞を表す。

(6a)と(6b)も擬音語である。(6a)が＜重ुकたたいものが1回ぶつかる音＞を、(6b)は＜重ुकたたいものが落下してぶつかる音＞を表す。この「がたり」は、辞書を見る限り基本的に擬音語のみとして用いられており、「がたっc」のように＜数値や状態が急に下がる様子＞としてはあまり使われないようである。これは構成要素である「-リ」音がゆったりした感じを付与するものだからであろう。

(7) 「かたん」

a 仏壇の位牌が風でかたん倒れた。(飛)

b 何もしないのに飾り棚の人形の首がかたん落ちた。(阿)

(8) 「がたん」

a がたん大きな音がしてドアが閉まった。(飛)

b ガタンと音がして…月琴が…石の間に落っこちた。(山)

c 二学期に入って成績ががたん落ちた。(飛)

(7a)と(7b)は、「かたっ」「かたり」と同様擬音語であり、＜軽ुकたたいものが1回ぶつかる音＞と＜軽ुकたたいものが落下してぶつかる音＞を表す。

「がたん」は「がたっ」と同じ拡張の仕方を見せる。(8b)から聴覚的情報＜重ुकたたいものが落下してぶつかる音＞からメトニミーにより視覚的情報(4b')＜重ुकたたいものが落下してぶつかる様子＞へと焦点移動がおこり、そこから(4c)の＜数値や状態が急に下がる様子＞へとメタファーによって意味が拡張される。

【メタファーによる意味拡張】

起点領域[空間での動き]

目標領域[程度の動き]

スキーマ<<落ちる>>

(2)、(4)、(8)は、それぞれ擬音語と擬態語を両方持つ多義的オノマトペである。この4つの拡張過程を図示すると、(9)のようになる。

(9)を見ると、拡張元の領域は[空間での動き]であり、またその中に<重さ><かたさ><ぶつかる>という共通のイメージを持っていることがわかる。この<重さ><かたさ><ぶつかる>というイメージは、「がた」という語基のプロトタイプの意味であると言えることができるだろう。

この(9)の意味拡張を「がた」という語基のネットワーク上のものと位置づけると、(10)のように示すことができる。

この(10)の「がた」を、清濁の対立をもつ「かた」とも関連させた上で、「かた／がた」の持つネットワークとその中心的な意味を示すと、(11)のようになる。

(11)のように、語基として多義である「かた／がた」は、<かたいものがぶつかる>という意味をプロトタイプに持つことができるとわかる。

以上は、擬音語から擬態語へと意味拡張がなされると仮定したときのネットワークであった。

これを逆に擬態語から擬音語へと拡張されていくと仮定するとしても、(2c)(2d)と(4c)(6c)(8c)は意味が作用する領域は異なっており、また両者の間からはプロトタイプの意味を見出すことができない。さらには、「かた」と「がた」との間に、本来あるはずである清濁の意味の対立も見出せなくなり、「かた／がた」のプロトタイプの意味も得ることができなくなってしまふ。

このため、オノマトペは擬音語から擬態語へと意味拡張していくと見るべきであると言えるだろう。

2.2. 「きち／ぎち」の意味拡張

2.1 で示したような語基を中心としたネットワークを想定すると、以下のことが説明できるようになる。

(9) 「きちきち」

- a このこけし、首をひねるとききちきちと音がする。(阿)
- b 引き出しに下着がきちきちに詰められている。(飛)
- c 一生懸命走って終電車にきちきちで間に合った。(飛)
- d 彼女は何事にもきちきちしている人だ。(飛)

(10) 「きちっ」

- a 入ったら戸をきちっ閉めてくださいよ。(阿)

- b 母はどんなものでも公平に兄弟3人にきちっと3等分してくれた。(阿)
- (11) 「きちん」
- a ふたがゆがんできちんと閉まらない。(飛)
- b 起きたら布団をきちんと畳みなさい。(飛)
- (12) 「きっちり」
- a 和服のえりはきっちりと合わせた方が良い。(阿)
- b 今日はきっちり二万円の買い物だった。(飛)
- c 面接試験に臨むため、スーツをきっちり着込んで行く。

「きち」は語基レベルでは多義的であるが、「きちきち」が唯一の擬音語と擬態語を両方持った多義的オノマトペであり、それ以外の「きちっ」「きちん」「きっちり」は擬態語のみの意味しか持たない。この場合、「きちっ」「きちん」「きっちり」はそれぞれ単体ではどのようにしてその意味が得られているのか、現実世界との関連において不明であるが、「きち」という語基のネットワークを想定することにより、「かた／がた」と同様に「きち」の擬音語の意味から拡張されていると見るができるようになる。

(12a)の「きちきち」は擬音語であり、＜隙間なく組み合っているものが摩擦する音＞を表す。ここから、メトニミーにより(12a)＜隙間なく組み合っているものが摩擦する様子＞という擬態語へと拡張される。ここから「隙間なく組み合っているものの接合部分」へと全体-部分のメトニミーによって焦点が移動し、(12b)の擬態語＜空間的に過不足がなく組み合っている様子＞が得られる。

[きちきち 12a'→きちきち 12b]

【メトニミーによる意味拡張】

＜隙間なく組み合っているものが摩擦する様子＞→＜空間的に過不足がなく組み合っている様子＞

この(12b)から、(12c)の＜時間的に過不足がない様子＞へと、メタファーにより意味が拡張される。このとき、[空間での動き]から[時間]へと領域が移動している。

[きちきち 12b→きちきち 12c]

【メタファーによる意味拡張】

起点領域[空間での動き]

目標領域[時間]

スキーマ<<過不足>>

また、(12b)からは(12d)〈過不足なく行動する性格〉へとも、メタファーによって拡張される。

[きちきち 12b→きちきち 12d]

【メタファーによる意味拡張】

起点領域[空間での動き]

目標領域[性格]

スキーマ<<過不足のなさ>>

この「きちきち」の拡張の様子を図示したものが(16)である。

(13a)と(13b)は共に擬態語であり、(13a)は〈空間的に過不足なく組み合っている様子〉を意味し、この意味の領域は[空間での動き]である。(13b)は[ものごとの状態]という領域において〈基準に対し過不足がない様子〉を表す。この(13a)と(13b)は、[空間での動き]と[ものごとの状態]という異なる領域の間に〈過不足のなさ〉というイメージをスキーマとして、メタファーによって意味拡張がなされているものと思われるが、この段階ではどちらが起点領域で、どちらが目標領域であるかということを決めることができない。

そのため、(13a)と(13b)の拡張過程を(16)にならって図示しようとする(17)のようになるが、左右の順は便宜的なものである。

擬態語である(14a)の領域は[空間での動き]であり、〈空間的に過不足なく組み合っている様子〉という意味を持つ。また、(14b)は〈基準に対し過不足がない様子〉であり、領域は[ものごとの状態]である。

これも、この段階ではどちらが起点であるのか決定することができないため、拡張過程を図示しようとする(17)と同じようになる。

(15a)は擬態語〈空間的に過不足なく組み合っている様子〉であり、領域は[空間での動き]である。(15b)は[ものごとの状態]という領域において〈基準に対し過不足がない様子〉を表す。(15c)は、(15b)からメトニミーによって意味拡張されていると見ることができる。ものごとが基準に対して過不足がない状態である場合、その

ものごとの状態は整然としており、模範的であると言える。

[きっちり 15b→きっちり 15c]

【メトニミーによる意味拡張】

＜基準に対し過不足がない様子＞→＜整然としており模範的である様子＞

(15a)と(15b)(15c)の関係は、(17)と(18)同様、どちらが起点となる領域であるかと言うことはできない。

(17)～(19)を(16)と統合し、「きち」の意味拡張のネットワークとして図示すると、(20)のようになる。

以上のように、「きち」という語基のネットワークを想定することにより、擬態語としての意味しか持たない「きちっ」「きちん」「きっちり」は、「きちきち」の擬音語の意味＜隙間なく組み合っているものが摩擦する音＞から意味拡張によってその意味が得られていることを示すことができ、また「きちっ」「きちん」「きっちり」内における意味の拡張方向をも示すことが可能になっていると言えるだろう。

補足として、「きち」と清濁の対立を持つ「ぎち」のネットワークを示し、その上で(20)の「きち」のネットワークと統合させ、「きち／ぎち」のネットワークと、そのプロトタイプの意味を抽出する。

(13) きちぎち

a くいを3本ばかりくくって渡した橋だからね。乗るときちぎちするんだ。

(阿)

b 毎朝身動きもできないきちぎちの電車で通勤だ。(阿)

(14) ぎっちり

a 書画、写真、神体、道具、薬、玩具、その他、殆ど一生かかって蒐集したあらゆる種類のもの、八畳一間ぎっちりにつまっていた。

(21a)は[空間での動き]という領域における擬音語であり、＜隙間なく組み合っているものが摩擦する音＞を表す。この聴覚的情報が(21'a)の＜隙間なく組み合っているものが摩擦する様子＞という視覚的情報へとメトニミーによって焦点が移動し、擬態語の意味を得る。さらに、(21b)は(21a')から＜隙間なく窮屈に組み合っている

様子>へとメトニミーによって焦点が移動することで得られる。この<窮屈さ>というイメージは、「きちきち」の<隙間のなさ>が清濁の対立によりマイナスのイメージを持つようになったものである。

[ぎちぎち 21a'→ぎちぎち 21b]

【メトニミーによる意味拡張】

<隙間なく組み合っているものが摩擦する様子>→<隙間なく窮屈に組み合っている様子>

(22a)は[空間での動き]の領域の上にある擬態語である。(22a)は<大量のものが隙間なく組み合っている様子>を意味する。この<大量>というイメージは、(21b)同様、清濁の対立によってより「分量の多い様子」というイメージが加えられることで得られている。

(21)と(22)を「ぎち」のネットワークとして(23)に図示する。

「ぎち」を語基とするオノマトペは、擬音語も擬態語も[空間での動き]という領域におけるもののみの意味を持ち、基本的には他の領域への拡張は起こらない。

(20)の「きち」のネットワークと(23)の「ぎち」のネットワークを統合すると、(24)のように示すことができる。

「きち／ぎち」のネットワークはこのように形成されており、プロトタイプの意味は<隙間なく組み合ったものが摩擦する音>であると言える。

この場合、今一度擬態語から擬音語へ、という逆の拡張過程を仮定した場合、「きち／ぎち」のプロトタイプの意味を抽出することが不可能になってしまうため、擬音語から擬態語へと拡張していく、と考えるよいものと思われる。

最後に、これまで述べたようなオノマトペのネットワークについて論じる上で生じる一つの問題を取り上げたい。「がたがた」や「ざらざら」といった語基が反復された4モーラのオノマトペの場合、擬態語の用法によってアクセントが異なる場合があることということである。

(25) がたがた

a 戸ががたがた (HLLL) と震える。(擬音語/頭高型/副詞)

b 強い風が吹いているため戸ががたがた (HLLL) している。(擬態語/頭高

型/動詞)

b がたがた (LHHH) の戸を持ち上げる (擬態語/平板型/名詞)

b がたがた (HLLL) 煩い! (擬態語/頭高型/副詞)

c 部内で対立が起こったため、チームワークががたがただ (LHHH) だ。(擬態語/平板型/ナ形容詞)

このように、特に擬態語の場合は用法によりアクセントが異なるので、厳密に議論する上ではこれら全てを1まとめとするのは音韻論的・形態論的現象を無視しているという意見があるかもしれない。しかし、(10)で示したとおり、擬音語の副詞的用法「がたがた」から他の意味が拡張されていると見ることができると、あくまでも意味の拡張過程の議論である本論においては、問題としなくてもよいと思われる。

4. おわりに

本発表では、語基レベルで多義的なオノマトペのネットワークを想定した。これにより、以下の2つことが主張できるようになると思われる。

- ・ オノマトペにおいて意味拡張がなされる場合、擬音語から擬態語へと拡張する。
- ・ 語基として多義的であれば、1つの語としては擬態語の意味しかもたないオノマトペでも、その擬態語の意味の由来を擬音語に求めることができる。

語基レベルで多義的であるオノマトペにおいては、本発表では触れなかったものについても同様の振る舞いを見せていた。また、これにより、語基レベルで多義的なオノマトペが辞書には掲載されていないような意味で用いられていたとしても、本発表のネットワークを参照・拡張することにより説明が可能になるように思われる。

しかし、「わくわく」のような語基レベルでも擬態語の意味しかもたないオノマトペの意味はどこから得られているのか、という問題については残念ながら解明することができなかった。また、語基のプロトタイプの意味と音象徴とはどのような関係にあるのか、ということについても不明のままである。

しかしながら、オノマトペと音象徴の関係性について研究する場合、本発表のよ

うなネットワークを想定することにより、ある程度は問題を簡潔化することに貢献できているのではないかと思われる。

引用文献

- 伊藤理英(2002) 「オノマトペに関する考察 擬音語と擬態語間の教官格的比喩表現について」、『日本エドワード・サピア協会 研究年報』(16)、pp55-66
- 伊藤理英(2009) 『日本語オノマトペの比喩による意味拡張を中心とした認知言語学的考察』、제이앤씨
- Jespersen Otto(1922) “*Language its Nature Development and Origin*”, London:George Allen & Unwin LTD.
- 角岡賢一(2001) 「日本語オノマトペ語彙派生過程における語基」、『龍谷大学国際センター研究年報』10、pp43-68
- 角岡賢一(2002) 「日本語オノマトペ語彙の接辞」、『龍谷大学国際センター研究年報』11、pp35-61
- 角岡賢一(2003) 「日本語オノマトペ語基の多義性について」、『龍谷大学国際センター研究年報』12、pp23-44
- 金田一春彦(1978) 「擬音語・擬態語概説」、『擬音語・擬態語辞典』浅野鶴子編、角川書店
- 小林秀雄(1965) 「擬音語と擬容語」、『言語生活』(171)、pp18-29
- サディグル・エルドス・ラキムジャン(2010) 「日本語とカザフ語のオノマトペ語彙の対象研究」北海道大学文学研究科博士論文
- Sapir,Edward(1929) “*A Study of Phonetic Symbolism*”, *Journal of Experimental Psychology*,12:25-29.
- Shoko Hamano(1998) “*The Sound – Symbolic System of Japanese*”, Tokyo: Kuroshio.
- 田守育弘、ローレンス・スコウラップ(1999) 『オノマトペ 形態と意味』柴谷方良、西光義弘、景山太郎編『日英語対象研究シリーズ』6、くろしお出版
- 谷口一美(2003) 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』原口庄輔、中島平三、中村捷、河上誓作編『英語学モノグラフシリーズ』20、研究社
- Toshiko Waida(1984) “*English and Japanese Onomatopoes Structures*”,in *Bulletin of Osaka Women’s University, Studies in English*, 36.

○ 辞書

阿刀田稔子、星野和子(1995) 『擬音語擬態語使い方辞典』、創拓社出版

天沼寧編(1974) 『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版

飛田良文、浅田秀子 (2002) 『現代擬音語擬態語用法辞典』、東京堂出版

山口仲美編(2003) 『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』、講談社

Takehi Hisao, Lawrence Schorup, Ikuhiro Tamori(1996) “*Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*”. Trends in Linguistics. Documentation 12. Mouton de Gruyter.